

—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

サウジアラビア：アメリカのケリー国務長官の来訪

(11月5日ハヤート紙等)

2013年11月4日、アメリカのケリー国務長官はサウジを訪問し、同国のアブドゥラー国王、サウド外相と各々会談した。アブドゥラー国王との会談では、両国の協力の見通し、パレスチナ情勢、シリア情勢、地域・国際情勢とそれに対する両国の立場が議題となった。

『ハヤート』紙は、サウド外相との共同記者会見でのケリー長官の発言を要旨以下の通り報じた。

- * (シリアについての) 両国の相違は戦術的な相違であり、(アサド大統領追放という) 目的に相違があるのではない。
- * 安保理に対するサウジの不満を共有している。
- * シリア危機解決の唯一の方策は交渉であり、「ジュネーブ2」会議を開催、新しいシリアへの移行、アメリカ・サウジとの協議継続、シリアの反体制派との同盟が必要であると確信している。
- * 両国政府の関係は、大規模で長期にわたる戦略的関係である。
- * 今般の訪問は、同盟国を防衛し、アメリカが従来どおり行動することを確認するためのものである。イランとの関係に関し同盟国に驚きや否定的な影響を与えることはない。

(評価)

サウジは、国連安全保障理事会非常任理事国就任を辞退するなどの行動を通じ、最近のアメリカの中東政策に不満を表明してきた。今般のケリー長官来訪は、こうしたサウジの不満を抑えることを意図したものであろう。両国間の相違でアラビア語の報道機関が特に注目しているのは、シリア情勢についての相違である。しかし、ケリー国務長官との共同記者会見でサウド外相が「シリアはイランに占領されている」と述べたり、サウジの官民からの支援がシリアにおけるアル＝カーイダの増長を促したりするなど、シリアに対するサウジの立場は、危機の解決に資する現実的な対応と乖離しつつある。アメリカに代わる同盟者・庇護者が見当たらない中、サウジが現在のような政策とアメリカに対する不満の表明を続けるには、おのずと限界があろう。

(研究員 高岡豊)